

季節はずれの亡骸

紫 李鳥

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

小澤の死は食中毒によるものだった。だが、一通の手紙から、食中毒を利用した殺しだと確信した山崎は動き出した。

後編 前編

目次

5

1

前編

小澤博昭の死因はO157による食中毒だった。小澤の妻、安喜子の証言によると、小澤は普段から手洗いを励行していなかった。対照的に安喜子のほうは過剰なほどの潔癖症で、

「夕食後のシンクの掃除は欠かしたことがありません。ですから、ウチからの発生ではないと断言できます」

と、自分に落ち度のないのをアピールした。

では、どうして小澤一人だけが食中毒を起こしたのか。この事件を担当した山崎は不思議に思った。確かに、肉体疲労や胃弱体質などが食中毒と重なれば死亡に至る原因の一つにはなるが、それにしても、外から持ち帰った菌やウイルスが小澤の手に付着していれば多かれ少なかれ同居している安喜子にも影響が及ぶはずだ。だが、当の安喜子には全く症状がなかった。それが却って山崎に疑惑を抱かせた。大腸菌を食べ物に混入することもできるが、数日間の潜伏期間があるため、発症してからでは原因を特定するのは困難だ。

そんな時、新宿にある健康器具販売会社の小澤のデスクから一通の手紙が見つかった。

〈死んでお前に復讐してやる〉

筆跡から、女であることは間違いなかった。消印は小澤が亡くなる二日前だった。

小澤は病死ではなく、腸管出血性大腸菌を利用した殺人だと確信した山崎は小澤の身辺調査を始めた。小澤には女がいたのでは？同僚や部下に恨みを買うようなことはなかったか？

だが、皆が口を揃えた。「判で押したように真面目な人だった」と。つまり、恨みを買うどころか、女の影もなかったのだ。では、あの手紙は誰が書いたものなのか。毛筆で書かれたその文字は、なかなかの筆筆だった。これだけの筆跡の持ち主だ、誰か一人くらい心当たりがあっても良さそうなものだが。

そんな時、もう一度捜査をやり直すつもりで小澤の会社に赴くと、

運良く情報を得ることができた。

「あれっ、この字、どつかで見たな。……どこだっけ」

小澤と同年代の三十二、三の妹尾は、豊かな髪に手榴を入れると、筆跡を凝視した。

「……あつ、そうだ。ちよつと待つてください」

思い当たったのか、急いで腰を上げた。手にしてきたのは一枚のハガキだった。

「これです」

山崎が置いた便箋の横に並べた。

謹賀新年

昨年のご利用頂き

誠に有り難うございました

本年も何卒宜しく

お願い申し上げます

佐久間

「これは？」

「私が利用していた駐車場の主あるじからです」

「女の人ですね？」

「ええ。正月にこの年賀状をいただいて。綺麗な字だったんで、引き出しに仕舞ってたんです」

「確かに同じ筆跡ですね。特にこの『し』の伸ばし方に特徴がある。で、この駐車場は今でもご利用ですか」

「いえ。今はレンタカーショップになってますよ」

「このハガキをもらったのはいつ？」

「今年の一月です」

妹尾が消印を指差した。

「で、この佐久間という女性と小澤さんの関係ですが」

「さあ……小澤は車じゃなく、電車でしたからね。あの駐車場とは関係ないと思うけど、別のところで知り合った可能性はあるでしょうが」

「どんな感じの女性でした？いくつぐらいの」

山崎はメモしながら改行の準備をした。

「さあ……四十前ぐらいですかね？ハキハキしてて勝ち気そうな感じでしたね」

「うむ……」

レンタカーショップになっている元駐車場に行くと、近所のたばこ屋で話を訊いた。

「ああ、佐久間さんね？二月頃かしら、突然、姿が見えなくなって。佐久間さんがどうかしたんですか？」

老女は耳が遠いのか、自分の声を大きくした。

「駐車場を閉めた理由をご存じですか」

「さあ……突然ですよ」

「どんな人でした？」

「なかなかの別嬪べっぴんさんで、一人で何でもバリバリやってみましたよ」

「自宅はご存じですか」

「そのの信号を右に行った角の茶色いマンションですよ」

マンションの管理人から話を訊くと、今年の二月末に解約し、引越し先は分からないとのことだった。

「さあ、人の出入りは分かりませんが、亡くなった父親の跡を継いで駐車場を経営していたみたいですよ。あの一等地ですから、レンタカー屋に高額で売ったんじゃないですかね」

胡麻塩頭の管理人は憶測を交えながら、お節介な性格であることを自らが教えていた。

「あれだけの美人で金もあるんだ、男のほう放つとかないでしょ。ニヒヒ」

下卑げびた笑いをした。

管理人から教えてもらった不動産屋に行くと、佐久間孜子の実家を聞き出した。

盛岡。孜子の実家は、ぺんぺん草が生い茂る更地だった。豪邸であつただろうと思われる200坪ほどの敷地が、栄華の名残のようにどーんと構え、それが却つて物悲しさを如実にしていた。

「ええ、近所でも有名な旧家でしたよ。じえんこ持ちで、娘さんが器量よしなもんで、どこのどなたさんが婿入りするがつて、近所でも話題でしたよ」

中年女は箒ほうきを持った手を休めると、腰を反った。

「父つちゃんが心筋梗塞で亡くなつてからは東京さ引つ越して。母つちゃんは孜子さんが幼え頃さ病死してらから」

「孜子さんはどんな人でした？」

「いやあ、もう勉強のできる子で、美人の上さ頭もいいんじや、お婿さんが苦勞するわねつて、近所で勝手なごと言つてましたよ。ふふふ」

孜子は一体、どこにいるんだ。小澤への手紙は単なる嫌がらせか。食中毒を利用して小澤を殺したのは孜子じゃないのか。山崎は背中を湿らせた麻の背広を腕に掛けると、水分を含んだハンカチで首の汗を拭つた。――気分転換に遠野まで足を伸ばすと、河童伝説の民話を傾聴した。帰りに、「前沢牛ローストビーフにぎり寿司」を買うと、新幹線に乗つた。

数日過ぎても手がかりが掴めない山崎は苛立いらだつていた。ところが、間もなくして事態は急変した。

後編

スミダという男から署に電話があつたのだ。誰なのかと首を傾げていると、

「マンシヨンの管理人です」

と、本人が教えてくれた。

「人の出入りの件ですが、思い当たる男が一人いました」

「誰っ？」

思わぬ吉報に興奮した。

「後ろ姿しか見てないんですが、佐久間さんと一緒にエレベーターに乗る、髪がフサフサした」

……フサフサした髪？アツ！そうか。そう言えば、孜子の聞き込みの結果、共通していたのは、「美人」だった。だが、アイツだけは一言もそれを口にしなかった。普通の男なら真っ先にその言葉が出るはずだ。それがなかったということは、「美人は三日で飽きる」の類ではなかったのか。つまり、飽きるほどの付き合いがあつたということだ。

「佐久間さんとは、駐車場の契約がきっかけで親しくなりました。最初のうちは大人の女を感じさせ、なかなか魅力的でしたが、暫く付き合い合つと、妻との離婚を要求してきました。」

『私には財産があるのよ、食うに困らないわ。奥さんと離婚して私と結婚して』

佐久間さんはそう言って甘えてきました。しかし、いくら財産があつても十歳近くも上の佐久間さんと結婚する気はありません。拒む度に、口癖のように「私と結婚しないなら死ぬから」と言っていました。真に受けずにいると、いつの間にか引越していました。

ホツとしていると、例の、「死んでお前に復讐してやる」の手紙が会社に届いたんです。半信半疑でした。けど、それつきり何の連絡もなく、本当に自殺したのではと、確信に近いものを感じていました。

安堵あんどしていた矢先、小澤が係長に昇進する内示を小耳に挟んだんで。同期の小澤に対しては異常なほどのライバル心があつて。課長や部長のご機嫌を伺いながらごまをすつてきたのに、それが報われず、自分が候補にも挙がらなかつたのが悔しかった。

その時、思つたんです。佐久間さんからの遺書を利用してしようと。私と佐久間さんの関係は誰も知らない。だから、小澤の愛人に偽装しよう。だが、小澤が否定し、接点のないのが明るみになれば偽装がバレてしまう。……「死人に口なし」にするか。そうすれば、私が昇進する可能性もある。

殺害方法を考えていると、世間では〇157が大々的に取り上げられていた。そうだ、それを利用しよう。食中毒にすれば、誰も殺人だとは思わないだろう。他の社員は外で昼飯を食べるが、私と小澤は弁当だった。小澤が肉好きなのを知っていた私は、妻が作ったミニハンバーグの中に排水口のヘドロを押し込んだ。

『女房の手作りだ。味見してくれ』

そう言うと、

『おお、うまそうだな』

と言つて、口に入れた。

たつぷりかけたソースでヘドロには気づかなかつたようだ、小澤はうまそうに食べていた。翌日もその次の日もヘドロを押し込んだ肉団子を食べさせた。そして数日後、小澤は下痢と腹痛を訴えながら逝った。

それから、佐久間さんの筆跡を真似た小澤宛の封筒に、「死んでお前に復讐してやる」の便箋を入れ、投函した。会社の郵便受けからそれを取ると、小澤の引き出しに入れました。年賀状のことを正直に言ったのは、駐車場を利用していたことが後で分かつた時、隠したら逆に疑われると思つたからです」

妹尾敬直は俯うつむいたままだった。

「つまり、あなたは二人の人間を殺したわけだ」

「えっ？」

山崎に顔を向けた。

「仮に佐久間さんが自殺していたとしたら、自殺に追いやったのはあなたでしょう。あなたは遊びでも、佐久間さんは真剣だったに違いな
い。これは、男の身勝手が招いた殺人ですよ」

その言葉に妹尾は項垂うなだれた。

黒いコートを着た女子の遺体が発見されたのは間もなくだった。
傍らには睡眠薬の空き瓶があった。高木に覆われた山間の根雪が解
けるのは丁度今頃だ。

完